

山と博物館

第47巻 第1号 2002年1月25日

市立大町山岳博物館



鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁

鹿島槍荒沢奥壁回想

柳澤 昭夫

若い頃通いつめた荒沢奥壁を再び見たかった。自分のクライミングを思い直したかった。久しぶりに、正月は鹿島槍東尾根に行くことにした。冬の登攀を共にした長年の友人がパートナーである。しかし、元旦の夜から降り出した雪は止まない。残念ながら山行は中止するを得ない。

池田町に生まれ育って、山登りに魅せられた私の登山は後立山から始まった。その頃の私が大きな影響を受けたのは、東京商大の部報「針葉樹」である。鹿島槍の北壁、荒沢奥壁の冬の初登攀は、私の生まれる前、昭和の十年代である。重たく、貧弱な装備や技術で、浪高、東京商大、東大、早大のクライマーは、北壁や荒沢奥壁の初登攀をなした。この登攀を超えずして、私の登山の展開はありえないと鹿島や五龍のバリエーションルートの冬期登攀に夢中になったのが、四十年遅れた昭和三十年代の私の登攀である。幸い好運に恵まれ、幾つかの登攀をなすことができた。荒沢奥壁の南後フランケに自分のルートを拓くこともできた。やがて、昭和四十年代に入って、大岩壁、唐沢岳幕岩が私のクライミングの対象になる。かつては、全く不可能であった巨大なオーバーハンクを含む大岩壁に、最先端の用具を駆使して、六本のルートを拓き、なおかつ冬の初登攀もなすことができた。唐沢岳幕岩に関しては誰にも負けないと自負している。アルピニズムがより困難なクライミングを課題とするなら、自分のクライミングに後悔はない。だが、今西さんや小谷部さんの登山を本当に超えただろうかと自問するとき、悔しいながら否と言わざるを得ない。北壁や荒沢奥壁で繰り広げられた戦前のクライミングは、今もなお登山者にアルピニズムとは何かを問い続けている気がしてならない。

山岳博物館では、今、その頃の鹿島槍のバリエーションクライミングを掘り起こしている。未知なる困難に向う勇氣は、人間の創造性の根源ではないだろうか。豊かさに恵まれて失いつつある勇氣を掘り起こしたい。

(大町山岳博物館専門指導員)

八方尾根における注目すべき蛾類について

— オリンピックは蛾類の生息に

影響をおよぼしたか — (後編)

宮田 渡

⑨ ルリモンクチバ

Laena poorellae Butler

暖地性の種らしいが、時には大町市属沢のような高標高地で採れることがある(宮田、一九八四)。県内の採集例は少ない。

採集例 1♀ 一九九八年七月二十四日(定點1)

⑩ ネジロフトクチバ

Stryx campina (Guenther)

産出は散発的。県内の採集例は少ない。

採集例 1♂ 一九九六年八月二十二日(定點1)

⑪ ウスムラサキクチバ

Erieta peritendens (Walker)

南木曾町(二九〇m)のような低標高地から八方尾根(二六八〇m)のような高標高地にわたって得られるが、採集例の少ない蛾である。

採集例 1♂ 一九九六年八月二十二日(定點1)

⑫ フチグロシロヒメシヤク

Scopula ornata subornata (Prout)

産地が限定されるシヤクガ科の一種である。八方尾根における最初の記録は石神井高校生物部(一九六七)である。

採集例 1♂ 一九九六年七月十七日(定點2)

⑬ サザナミナミシヤク

Entephna caesiata nebulosa Inoue

高山蛾として知られるシヤクガ科の一種であるが、しばしば亜高山帯でも採集される。八方尾根の亜高山帯では個体数は少ない。過

去の記録には石神井高校生物部(一九六七)がある。

採集例 1♀ 一九九六年八月二十二日(定點1)、1♂ 一九九七年七月九日(以上、定點1昼間採集) 一九九八年には採集できなかった。

⑭ ナカクロモンシロナミシヤク

Cosmohoe ocellata (Linnaeus)

極めて産地が限定されるシヤクガ科の一種である。最初の記録が八方尾根である(日本産蛾類大図鑑、一九八二)。筆者は大町市扇沢一五〇〇mでライトトラップにより得ている(1♂、一九九六年八月四日)。

採集例 2♂ 一九九四年七月十四日(定點2)

⑮ ミヤマチビナミシヤク

Perizoma japonicum Inoue

本種はシヤクガ科の高山蛾である。八方尾根における記録には、石神井高校生物部(一九六七)・佐々木(一九六三)・倉田・長沢(一九六三)などがある。

採集例 1♂ 一九九四年八月八日(定點1)

⑯ その他の注目種

ミヤマウスギントガ

Cynabus hochimantanus Okano

メイガ科

1♂ 一九九六年七月十七日(定點2)

ウスベニノメイガ

Evergestis extimulata (Scopoli)

メイガ科

1♀ 一九九四年八月四日(定點3)

シロジマエダシヤク

Eryopteris longistata (Walker)

シヤクガ科

1♂ 一九九四年七月三十日(定點6)、

1♂ 一九九八年八月二十一日(定點2)

オオタバコガ

Heterocampa amigera (Hübner)

ヤガ科

1♀ 一九九四年十月一日(定點2)

スジクロモクメヨトウ

Dypterigia andreyi Karadakoff

ヤガ科

1♀ 一九九四年七月三十日(定點6)

キイロトガリヨトウ

Brachyranthia zelofa (Leclercq)

ヤガ科

1♂ 一九九四年八月八日(定點1)

セプトモクメヨトウ

Tachinus saga (Butler)

ヤガ科

1♀ 一九九六年八月二十二日(定點1)、

1♂ 一九九八年七月二十四日(定點1)

ホンバミドリヨトウ

Eupherasia angusta Yoshimoto

ヤガ科

1♂ 一九九四年十月一日(定點2)

ムラサキキンウワバ

Autographa buratfa (Staudinger)

ヤガ科

1♂ 一九九六年八月二十二日(定點1)

ムラサキオオアカキリバ

Anomis langipennis Saig

ヤガ科

1♀ 一九九四年十月一日(定點2)

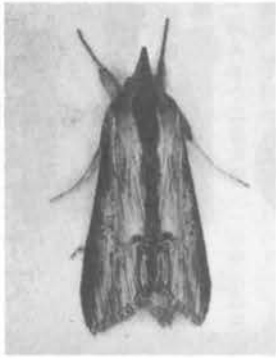
四、あとがき

一九九四年から一九九八年にわたり、オリンピック会場整備事業に係る環境アセスならびに環境モニタリングのための調査部門のうち昆虫部門に携わった。この中から、蛾類のみを選び、整備事業(一九九六—一九九七年)が蛾類の生息に影響をあたえたかどうかを検証してみた。

① 調査期間中に得た蛾類は五一七種である。定點1の年次別飛来種類数をみると、会場整備事業後の蛾類の種類数は減少している。このことは、定點2においても同様である。すなわち、一三三種→二二〇種→八三三種→六一種(の如くである。ただし、これは整備事業が原因だと断定できない。

② 注目すべき五種のなかでは、アズミキシタバがもともと整備事業の影響を強く受けている。アズミキシタバは一九九七年以降、調査地内のすべての定點で姿を消した。その他の注目種を含めて、多くの種が採れなくなってきたが、逆に、タイワンキシタクチバ・ルリモンクチバ・セプトモクメなどのように整備事業後に新たに採集された種類もある。また、タカネキクセダカモクメ・アルブスギンウワバ・クビジロツメヨトウのように調査開始から整備事業終了後にわたってコンスタントに採集できる種類もある。クビジロツメヨトウの食草はアズミキシタバのそれと同じであるにもかかわらず発生が安定している理由は不明である。整備工事の影響を受けるか否かは、種によって異なるようである。

(大町山岳博物館嘱託学芸員、農学博士)



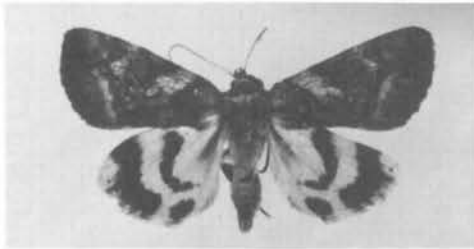
①タカネキクセダカモクメ



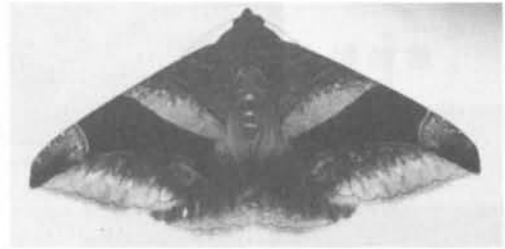
②クビジロツメヨトウ



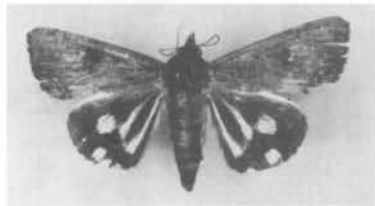
④マツバラシラクモトウ



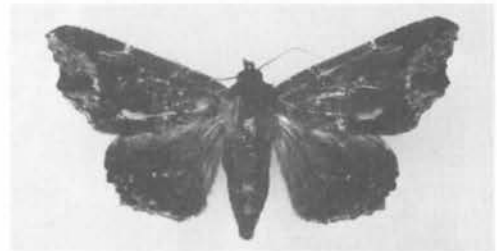
⑤アズミキシタバ



⑦ムラサキアシブクチバ



⑧台湾キシタクチバ



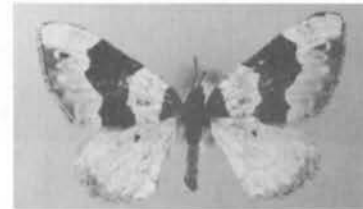
⑨ルリモンクチバ



⑩ネジロフトクチバ



⑫フチグロシロヒメシャク



⑭ナカクロモンシロナミシャク

〈文献〉

井上寛・杉繁郎ほか(一九八二)「日本産蛾類大図鑑第一巻」講談社

大和田守(一九七二)「日本未記録種 *Oreocnemis camptocla* Lederer, Kubijiro-tsumeyotou (新称) について」蛾類通信、(六九) 一三

五—一三七

佐々木浩一(一九六三)「ミヤマチビナミシヤクを八方尾根で採集、ニューエントモロジト、(二七七) 四二

倉田稔・長沢正彦(一九六三)「日本北アルプス地方の蛾類(IV)、ニューインセクト、七(一八) 九—一二

石神井高校生物部(一九六七)「八方の自然」石神井高校生物部

神保一義・柳田慶浩(一九七八)「北アルプス、後立山連峰白馬岳—五竜岳の高山帯の蛾、長野蛾報(一〇) 一—九

宮田渡(一九八四)「ガ類」大町市史自然編、大町市産動物目録、二〇三—二四五

(一九九六)「ガ類」白馬の歩み、自然環境編、五三四—五三八

(二〇〇〇)「その他の昆虫と貝類」

「白馬村の貴重動植物」七一—八〇

杉繁郎(一九八九)「マツバラシラクモトウを長野県小谷温泉で採集、蛾類通信(二五五) 七—二

Sugi, S. (1965) New and unrecorded species of *Carocala* Ochs. from Japan and Formosa (Lepidoptera, Noctuidae). *Tinea*, 7(1): 84-93

注 本文は大町山岳博物館編「新・北アルプス博物誌」(信濃毎日新聞社、二〇〇二)の編集時、新たに書き下ろしていただいた文章です。(編集部)

長野県大町市でツマグロヒョウモンを観察

清水博文

長野県大町市でツマグロヒョウモンのメスを観察したので報告する。

このチョウは多化性（一年間に成虫が何回か発生して卵から成虫までの世代が重なり合う）の種であり、暖帯から亜熱帯・熱帯まで広く分布し、日本は分布の北限にあたる。近年長野県内でも夏から秋にかけて多くの個体が目撃されるようになってきている。



写真1 ツマグロヒョウモンのメス
(2001.10.30大町市高根町)

観察時の天候は晴れて、気温は摂氏一六度前後であった。このチョウは川の下流方向より飛翔してきて数秒護岸にとまった後、上流方向（北西方角）に移動していった。

翅の損傷等は見られず新鮮な個体であった。写真撮影後すぐ追跡したが見失った。翌日に同場所付近を探したが発見することはできなかった。また、この付近にスマイレ（在来種および園芸品種）の群生地は見当たらなかった。また、この一年前二〇〇〇年十月十四日に北安曇郡松川村板取の住宅地でもこのチョウのメス一個体を観察しているので併せて報告する。

ツマグロヒョウモン属は一属一種の、大型のヒョウモンチョウである。雌雄で斑紋の色

彩が異なり、メスは前翅の先から約二分の一が紫色をおびた黒色で、その中に斜めの白帯があるが、オスはほかのヒョウモンチョウの仲間と似た斑紋をしている。

このチョウの安曇地方における記録を見ると、本種は一九五〇年九月十二日に北安曇郡白馬村飯田においてメス一個体の採集記録大町市での目撃記録がある（北安曇誌一九七〇）。

近年では、一九九五年より南安曇郡三郷村で幼虫越冬も確認されている（中田・那須野一九九〇）。

また、標高の高い長野県南安曇郡安曇村上高地中ノ瀬園地の梓川沿いなどでツマグロヒョウモンのメスやつがい確認されている、と新聞でも報道されている（朝日新聞二〇〇一）。

このチョウは気候の温暖化の影響や、主要な食草となっている園芸品種であるスマイレ（ピオラ）の花壇などの植え込みや、野生化（逸脱した個体の帰化）の増加とともに分布域を拡大させているようである。

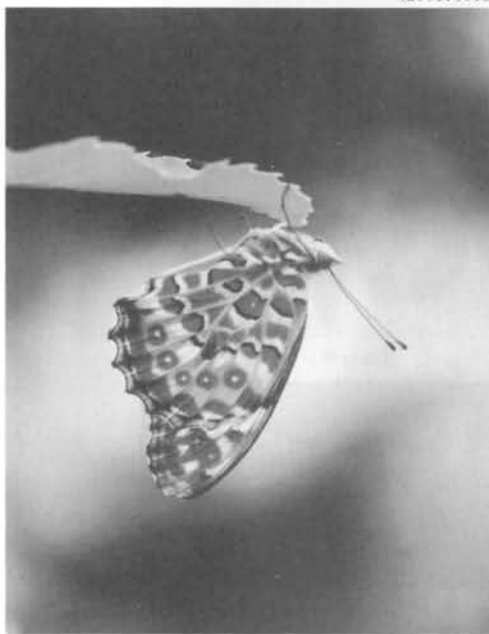


写真2 ツマグロヒョウモンのメス
(2000.10.14北安曇郡松川村)

大町市で越冬できるのかは不明であるが、そのうちに大町市でも普通に見ることのできるチョウとなるかもしれない。今後近縁在来種との関係などともに動向に注目したい。



写真3 ツマグロヒョウモンのオス (2001.7.1松本市)

参考文献

- 北安曇誌編集委員会（一九七〇）北安曇誌第一巻自然（蝶類）950-951.
- 福田晴夫ほか共著（一九八三）原色日本蝶類生態図鑑（II）保育社.
- 中田信好・那須野雅好（一九九〇）三郷の蝶（95）三郷文化53:50-51.三郷村
- 山下昌志・西尾規孝・丸山潔 編（一九九〇）長野県産チョウ類動態図鑑文二総合出版
- 朝日新聞記事（二〇〇一.8.24）長野版25

（市立大町山岳博物館学芸員）

山と博物館第47巻第1号

発行 千原 長野県大町市大字大町八〇五六

市立大町山岳博物館

TEL 0266-31-1101

FAX 0266-31-1111

印刷 大系タイムス印刷部

定価 年額一、五〇〇円（送料共）切手不可

郵便振替口座番号〇〇九四〇七二二五九

記録

和名 ツマグロヒョウモン メス 一個体

学名 *Azygus hyperbius hyperbius*

(Linnaeus)

観察日 二〇〇一年十月三十日 十三時十分

ごろ

観察地 長野県大町市高根町高瀬川河川敷

（左岸）